

遺伝子産物は、複合体を形成し、機能することが解明されつつある。よって mel-18 遺伝子産物を bait として yeast two hybrid system を用いて複合体の形成の可能性と因子の同定を行った。

7. ほ乳類ポリコーム遺伝子 Mel-18 に相互作用する Ring 1 B 遺伝子欠損マウスの作製

横田 剛, 丹沢秀樹 (千大)
赤坂 武, 古関明彦
(同・発生物)

ポリコーム遺伝子群 (Pc-G) は、蛋白複合体を形成し、染色体と相互作用することにより転写制御機能を持つと考えられているが、詳細なメカニズムは不明である。複合体組成と、生物学的な機能を明らかにするため、哺乳類 Pc-G に属する Mel-18 を Bait にして Yeast two hybrid screening を行い、Pc-G に属するものとしていくつかの Pc-G 蛋白がクローニングされてきた。そのうちの 1 つである Ring 1 B に対するモノクロナール抗体を作製し、Pc-G 複合体の核内での機能を解析するために、免疫染色法を用いてコンフォーカル解析を行った。また同時に Ring 1 B 領域の genomic organization を解析し欠損マウスの作製を試みた。

8. ニワトリ初期胚神経管への Mel-18 遺伝子発現及びホメオボックス遺伝子発現

鈴木真紀, 山木 誠, 横田 剛
丹沢秀樹 (千大)
古関明彦 (同・発生物)

哺乳類ポリコーム遺伝子の一つである Mel-18 の生物学的な機能を解析するために、ニワトリ初期胚の神経管で Mel-18 タンパクを過剰発現させた。Mel-18 遺伝子産物は、ホメオボックス遺伝子発現の前方境界より前方での発現抑制の維持を通じて発現コントロールに寄与し、Mel-18 と結合タンパクである Ring 1 B との過剰発現は、相乗的に抑制維持するのに必要であることが示された。

9. インターロイキン 6 (IL-6) が口腔扁平上皮癌に及ぼす影響について

今井 裕, 佐々木忠昭
(獨協医大・口外)

本研究の目的は、口腔癌における IL-6 の役割を明らかにすることである。方法は、口腔扁平上皮癌細胞株 (STC-98) を用い、培養上清中の IL-6 の測定 (ELISA 法)、IL-6 mRNA の発現 (RT-PCR, Northern blot.), IL-6 の発現に対する各種サイトカイン (TNF-

α , IL-1 α or LPS) の影響そして IL-6 ならびに抗 IL-6 抗体が、細胞増殖に与える影響を検討した。その結果、STC-98 は IL-6 を産生し、autocrine growth factor として働くことが示唆された。

10. 先天性エプーリスの 1 例

野本昌良, 秋葉錦宏, 渡辺俊英
(千大)

患者は生後 4 カ月、女兒。授乳障害を主訴に当科を受診した。全麻の危険性、後継永久歯の保護と病理組織学的診断を得る為に基部より結紮し、切除した。病理組織学的診断；肉芽腫性エプーリス。先天性エプーリスの報告例の中で、肉芽腫性を示したのは自験例を含めて 4 例のみだった。本症例において、右下乳切歯の切端が萌出しており、それが慢性的持続的刺激となり 2 次的に炎症が生じた可能性があると思われた。

11. 顎骨に膨隆をきたした二次性副甲状腺機能亢進症の 1 例

水町裕義, 磯野大輔, 宮 恒男
(千大)

患者 58 歳、女性。主訴：口蓋の膨隆。初診 12 年前から透析療法を開始し、初診 3 カ月前より口蓋部が膨隆。臨床所見、臨床検査、X 線検査、RI 所見より二次性副甲状腺機能亢進症と診断。1998 年 10 月 5 日、膨隆部の骨生検を、同月 21 日、口蓋部減量術を施行し、線維性骨炎の診断を得た。翌年、副甲状腺全摘出術および一部自家移植術を施行した。顎骨に膨隆を伴う本疾患の過去の報告例と併せて統計的観察を行い報告した。

12. 根尖性セメント質異形成症の 1 例

島本則仁, 横田 剛, 宮 恒男
(千大)

患者：24 歳、男性。主訴： $\overline{2}$ の違和感。現病歴：近歯科にて $\overline{2}$ の咬合性外傷の処置、その後、感染根管処置を受けるも症状改善せず、当科紹介され来院。口腔内所見では $\overline{2}$ 根尖相当部に大豆大、骨様硬の腫脹を、X 線学的には $\overline{2}$ 根尖に連続した周囲に一層の透過像を伴う石灰化物様の不透過像が認められた。 $\overline{2}$ 根尖部の腫瘍摘出術を施行し、根尖性セメント質異形成症との病理組織学的診断を得たので、若干の統計的観察も含め報告した。